留学報告書
つながり

ノースカロライナ大学　ウィルミントン校
外国語学部（長期）

今回のアメリカ交換留学の経験は、私にとって初めての海外経験でもあった。今までの人生の中で一度も訪ねたことがない世界へ行くことは、とても大きな挑戦であり、やり遂げた今、自分が成長できた事実を実感している。

だが、自分一人だけでは、長期アメリカ交換留学を成し遂げることは不可能であった。帰国した今感じているものは、自分のことを支えてくれていた人たちへの感謝の気持ちである。家族、親戚、近所の方、友達、教授、先生、大学の機関の方たち、現地でお世話になったフレンドシップファミリーの方、同じくインターナショナルの友達、派遣先のノースカロライナ大学に在学している友達、学外の友達、教授、大学で働いている方々、協会の方々…。留学するという大きな夢をやり遂げる過程で、たくさんの人に支えられてきた。

留学報告書に記載するのは、その中でも特に、フレンドシップファミリーの方たちである。彼らと共有した時間は、私にとって１番の思い出であるからだ。また、彼らなしでは、私はアメリカ生活をおくることができなかった。留学中ずっと、彼らが私に楽しみ、知識、英語能力、喜び、サプライズ、文化、経験をもたらしてくれた。フレンドシップファミリーの方たちのおかげで留学生活が内容の濃い、素晴らしいものになったのである。

彼らを知ったのは、留学前、自分の交換留学派遣先が決まったとき、同じ大学に少し前に交換留学していた先輩から、サポートしてくれるのはキリスト教の方だと聞いた時であった。アメリカ、ノースカロライナ州現地に、私の知っている人は誰もいないため、出国する前に何かコネクションを作っておきたいと、私は必死であった。長期留学が決まったときは、飛び上がりそうなほど嬉しかったが、実際に準備を始めていくと、知らないことばかりで不安が募る日々であった。そんな中知った彼らに、私は早速メッセージを送った。彼らは、留学先大学のオフィスの人以外で初めて知り合った現地の人であった。

彼女はすぐに返事をくれた。Nice to meet you と。そして、私のことをサポートしてくれると言ってくださった。まだ、お互いのことをメッセージ上で知っただけであり、写真を通してでしかお互い顔を見たことがない関係であったが、その文面を見て、私は幾度か安心感を覚えた。

交換留学先大学から、数多くのメールが私のもとに届くようになり、試験の長文のような次々届く英語のメールに圧倒されそうになった。私は、一つ一つ時間をかけて、繰り返し丁寧に読み、不備がないように手続きを進めた。だが、その中で大学のホームページを見ても、はっきりとしたイメージが持てない内容もいくつかあった。そのため私は、彼女に聞くという選択肢をとった。ミールプランなど、馴染みのないアメリカの大学のシステムについて、彼女は説明してくださった。加えて、それらに関することについて、次々と浮かぶ私の質問に、数多く答えてくださった。これらはすべてメッセージでのやりとりであったが、ま

だ会ったことのない私に親切に接してくださった。

彼女のサポートを受けつつ、私は長期アメリカ交換留学に行く公式手続きと準備を進めた。

未知の世界に行く事は、楽しみである反面、不安でもある。ずっと叶えたかったアメリカ留学という夢が叶おうとしている中、出国日が近づくにつれて、私は不安の方が大きくなっていくのを感じた。海外に行ったことがない、飛行機に3時間以上乗ったことすらない、一人暮らしをしたことがない私にとって、数週間後に飛び込もうとしている世界は、今までの自分の常識が通用しない、今まで経験したことや聞いたことすらない場所であり、全く新しい、途轍もない挑戦であった。

だが、フレンドシップファミリーの方と留学前に知りあうことができたおかげで、大きく膨らんだ不安が、少し減った。また、自分自身今まで努力してきたことを振り返ったり、今できる限りの対策、トレーニングをしたりすることで、自信を取り戻し、Excitement の気持ちが勝る、こういった心境で出発の日を迎えることができた。これから始まる約9か月間の留学への期待で胸を膨らませ、日本を後にした。

しかし、アメリカ・ノースカロライナ州到着までの道のりも、単純で、スムーズにいくものではなかった。ニューアークからウィルミントンまでの飛行機が遅れて空港で 2 時間以上待ち、最終的に私がウィルミントンに降り立つことができたのは、深夜2時ごろであった。

日付を超えて空港に着いたのにもかかわらず、フレンドシップファミリーの方は、私のことを空港で待っていてくださった。そして、私を暖かいハグで迎えていれてくれた。長旅でとても疲れていたし、新しい土地、初めての出来事ばかりで緊張していたが、彼らの温かさに少し気を落ち着けることができた。

留学中、フレンドシップファミリーの方は、私や他のインターナショナルの学生を買い物に連れていってくれたり、家でパーティーを開いてくれたりした。キリスト教徒であるため、教会にもよく連れていってくれた。彼らには、私と年が近い子どもが４人おり、何度か顔を合わせるうちに、みんなとすぐに仲良くなった。一緒に教会に行ったり、食事をしたり、サッカーをしたりして、兄弟であるかのように時間を共にした。また、彼らの家で開かれるホームパーティーは1学期の間に2回または3回ほどあり、私はそのすべてに参加した。

3回目のパーティーの際は、前日に彼らの家に行き、パーティーの準備を手伝った。やることが沢山あり、準備には丸一日かかったが、一緒に楽しく行うことができた。また、彼らから、自分から手伝うといってくれた学生は私が初めてだと、感謝されたときはとても嬉しかった。私自身も、彼らと時間を共にすることで、アメリカの文化に多く触れることができたり、現地で食べられている料理の作り方を学べたり、英語のスピーキング力や発音を練習したりできるため、とても良い時間であった。以降、私はパーティーの準備だけに限らず、教会で開かれるイベントの手伝いに行ったり、彼らの買い物を手伝ったり、一緒に料理を作ったりした。

フレンドシップファミリーの方やその家族と多くの時間を共にするにつれて、彼らと私の関係はどんどん変わっていっているように感じた。私にとって、彼女は、アメリカの母親のような存在になっていた。困ったことがあったときはすぐ相談できる、お互いにプレゼントを贈りあう、一緒に買い物に出かける、テレビを見る、料理をするなど、フレンドシップファミリーという関係を超えた、特別な存在であった。

彼は、私にキリスト教について、多くを共有してくれた。彼から得る学びは沢山あり、人生において大切なことや、彼らがなぜそれほどキリスト教の教えに従うのかを教授してくださった。加えて、アメリカの歴史や、地元のこと、彼らが今までに訪れたことのある世界各国の話など、私の知識の幅を広げてくださった。さらに私は、彼からユニークなジョークを数多く学んだ。

彼らの４人の子供のうち、私は１番下の女の子ととても仲良くなった。特にパーティーの準備をする際や私が彼らの家にお邪魔したとは、楽しくおしゃべりをしたり、一緒にボードゲームをしたり、ピアノを弾いたり、ジョークを言いあったりするなど、ずっと前から知り合っていたかのような自然な関係であった。彼らは皆、まるで私が家族の一員であるかのようにいつもカジュアルに接してくれて、彼らと過ごす時間は、楽しく落ち着きのあるものであった。

日々、大学で寮生活をしている私にとって、フレンドシップファミリーの方たちが１番近い家族であり、彼らはフレンドシップと言う名を超えた、私のアメリカの両親、兄弟であり、かけがえのない存在であった。

日本から何キロも離れたアメリカのノースカロライナ州。留学をしなかったら、知らなかった土地、空気、出会うことのなかった人々。このような視点から考えると、今回の長期アメリカ交換留学は、私の人生の中でとても貴重で、多大なる影響を与えた約９か月間の経験であった。

そして何より、一番の財産は、私のような留学生、ほかの国から来た赤の他人を、あたたかく迎え入れ、受け入れてくれる方たちに出会うことができたこと、また、フレンドシップファミリーという枠を超えて、家族のような素晴らしい関係を築くことができたことである。私は、人と人とのつながりの強さ、国をも超えた関係性を築くことのすばらしさ、を身に染みて感じた。以上、私が長期アメリカ交換留学から得た学びである。